



先生のひとこと (Part3)

校長 田中 俊光

TOKYO FMの番組「ジブラルタ生命Heart to Heart ありがとう、先生」は、「誰もが昔は生徒でした、教室で、グラウンドで、先生がくれた言葉に、いま、ありがとう！」というナレーションから始まります。この番組に全国から寄せられた「先生のひとこと」をまとめた本から、2月号に引き続きいくつか紹介します。

「変わりたいと思ったときが変われるとき」

クラスに挨拶ができない人がいました。そのクラスメイトは「本当は自分から挨拶したい」と言い、先生はこの言葉ではげました。いまでも、変われるか変われないかは自分次第と言い聞かせています。
(愛知県「ポッポ」さん35歳)

「できない理由を探さない！ できる方法を考えよう！」

中学の部活の先生の言葉です。社会人になったいま、言い訳をせず、できる方法を探す努力をしています。
(宮城県「928」さん45歳)

「夢を追うのに、年齢は関係ない」

社会人になってから4年目のこと。子どもの頃からの夢だった職業をあきらめきれず、高校の恩師に相談に行ったときに言われた言葉です。その後、改めて希望する大学に入学し、いま、勉強しています。
(東京都「みどみど」さん30歳)

「乗り越えられない壁は、穴を掘ってくぐり抜けろ」

ひとつのことに固執してしまう自分に、先生がかけてくれた言葉です。方法はひとつだけでなく、考えれば何通りもあるということを教えてくれました。おかげで、柔軟に考えて結論を出せるようになりました。
(大阪府「たろ」さん31歳)

「高く跳ぶには、深く^{ひざ}膝を曲げないと跳べないよ」

高校3年生のとき、進路について悩んでいました。この言葉のおかげで、志望校ではなかった大学を受験するのをやめ、浪人することを決意。その後、志望校に合格することができました。
(東京都「スタバ42193」さん51歳)

「恋はときめくもの。愛は貫くもの」

授業中、恋と愛の違いを聞いた生徒に対して、気持ち良いくらいに即答してくれました。子供心にカッコいいと思いました。いまでも忘れられない言葉です。
(茨城県「こっこ」さん30歳)

「壁にぶつかるのは、前に^{あかし}進んでいる証」

学生時代の部活で、なかなか上達できず、落ち込んでいたときにいただいた言葉です。乗り越えれば、ひとまわりもふたまわりも大きくなれるよって。元気の出たひとことでした！！
(愛知県「よっし〜」さん44歳)

「心の物差しは、みんな違う」

不満だらけの日々を送っていた高校生の頃、先生に言われたひとことです。それ以来、人にやさしくなれました。怒りっぽくなったこの頃、またこの言葉を思い出しています。

(岩手県「つっこ」さん60歳)

(「ありがとう先生！」 TOKYO FM 株式会社エフエム東京)

荒瀬 収甫（育造）の功績

荒瀬 収甫について紹介します。収甫は、校長室だより1月号で紹介した、そして「ほうふ市議会だより2月号」の表紙を飾った荒瀬桑陽の長男です。本校の荒瀬先生の曾祖父（ひいおじいちゃん）に当たる方です。荒瀬 収甫は、医学の世界で実績を残した人です。残っている資料が断片的だったので、本校の荒瀬先生に依頼してその功績について書いてもらいました。

荒瀬 収甫（初め育造）は、天保12年（1841年）11月父桑陽（武五郎）の長男として、三田尻村高洲（現在の華浦一丁目8番）で生まれる。安政4年（1857年）16歳の時に長崎に赴いて（父桑陽が町年寄・儒役の外庶務をしていた）、幕府の医官松本良順（後の初代陸軍軍医総監）の門に入り、さらに万延元年（1860年）19歳の時、萩藩主毛利敬親公の許可を得て、良順を紹介して、オランダ海軍三等軍医ポンペ・ファン・メールデルフルト（日本の幕府が初めて西洋医学を日本にとり入れるため招待した）に従学した。収甫は、長崎の地で6年間（ポンペに師事したのは2年間、その後アントニウス・ボードインに4年間）医学を学んだ。その後山口県に帰り、三田尻警察署嘱託鑑定医、華浦医学学校教諭あるいは、山口県現地開発医師審査委員等をつとめた。また、開業のかたわら医事研究所の世話をした。

日本近代医学の父といわれるポンペの教育は、基礎医学から臨床医学にわたる専門学を総合的・系統的に教授し、また、臨床体験を重視して努めて学理と実地を統一させようとして行われた。長崎大学医学部は、ポンペの次のような医戒を校是（その学校設立の根本精神）にしている。

「医師は、自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものでなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら他の職業を選ぶがよい」（長崎大学医学部創立150年記念誌P41～P42）

長崎大学医学部の基礎本館入口の壁には、ポンペ顕彰記念会（顕彰：個人の著名でない功績や善行などをたたえて広く世間に知らしめること）から贈られたポンペのレリーフが飾られており、その下にこのポンペの言葉を刻み込んだ青銅板がある。

このような医の真髄を教えたポンペの言動は、門弟たちの心に深く刻み込まれた。ポンペの若い門弟荒瀬育造は、後年自分の屋敷にポンペを祀る神社「ポンペ神社」を設けて礼拝を絶やさなかった。松本良順は、緒方洪庵がポンペのコレラ治療を批判したとき、師の名誉のために敢然と戦った。15代将軍徳川慶喜に非人の廃止や提案をし実現させている。

「ポンペ神社という祠」（祠：神を祀る小規模な殿舎）のことは、後に作家司馬遼太郎が「この国のかたち」という本の中で、「荒瀬育造は、ポンペ先生への感謝を込めて、自分の屋敷にポンペ神社を作った。そして、妻や子供、孫に『神道』として伝えられた」と記述している。

収甫は、明治17年（1884年）10月今の防府市野島に往診後、急性肺炎のため居宅で病死した。享年44歳であった。菩提寺明覚寺墓域に「医事研究所」贈の石灯左右一対がある。また、一周忌には、当時華浦病院の診察医官、秋本里美（野村望東尼の歌友であり主治医）が次の弔歌（人の死を悲しむ歌）を献じている。

{ 消してまた 咲ある霜の花も 阿るを 千代邊む菊のか礼て 一と勢 }

「霜は、毎朝のように白く咲くが 毎年のようにずっと咲く菊ではあるが、この枝は、勢いはあがるが、枯れて一年で終わってしまう。この世に必要な人が早くなくなるのは残念だ」かな？

大正14年（1925年）医制発布五十周年記念の年、佐波郡医師会は、敬頌状（敬頌：尊んで礼をつくし、ほめたたえる）を贈って故人を追慕（死者や遠く離れて会えない人などを、なつかしく思うこと）した。（長崎大学医学部創立150年記念誌、防府医師会史）